

## 第6回 市民活動促進協議会（第8期） 会議録

- 1 開催日時 令和4年8月23日（火） 14時00分～16時00分
- 2 開催場所 静岡市番町市民活動センター 2階 大会議室
- 3 出席者 <出席委員>山岡会長、山本副会長、池田委員、大畑委員、  
片井委員、川村（栄司）委員、川村（美智）委員、  
北川委員、木下委員、田中委員、殿岡委員  
<事務局>伊藤市民自治推進課長、田中係長、出雲副主幹
- 4 傍聴者 0人
- 5 議 事

（山岡会長）

それでは早速ですが議事に入ります。次第に沿いまして本日の議題、答申の内容について事務局から説明をお願いします。

（事務局）

資料1と資料2をご覧ください。資料1は8月の頭に答申の事務局案として皆さんに一旦お送りしました。それに対していただいた意見を反映したものになっています。いくつかのご意見につきましては、どのように反映させていくかも含めて本日ご審議をいただければと思います。まず私の方から、当初の案からの修正点について簡単に説明します。なお、資料2はその修正をさせていただいた項目の一覧となっています。

では修正点の説明ですが、資料1、めくっていただいて1ページに、事務局からの提案ですけれども目次を入れました。

次に、1枚めくって3ページですけれども、一番頭の項目2が元々「現状」となっていたが、単に事実だけ述べているわけではなくて、捉え方とか認識も記していますので「現状認識」と、これも事務局提案ですが、修正させていただきました。

その下の文章の2段落目、中ほど、横線で消してありますが「孤立を感じざるを得ない状況」と書いてありましたが、言い回しについて違和感があるというご意見いただきましたので、「孤立を感じやすい境遇」とさせていただきます。

また、資料1の方に反映できてないのですけれども、事務局からの提案としてもう一点、3段落目で、「令和4年に入ってからロシアによるウクライナ侵略…」とありますが「侵略」を「侵攻」という言葉に変えたらどうかと考えています。言葉が決まっているわけではない

ですが、その方がやや中立的な意味合いがするのかなと考え、修正をさせていただきます。その下、赤字で「また近年の国際的な動きの一つとしては…」のところについて、元々、事務局案ではSDGsを項目立てしていたのですけれども、SDGsのために市民活動があるような印象は避けること、とか、市民活動の意義、それがSDGsによって再定義されて強調されたといったような、そういった趣旨を反映してほしいといったご意見をいただきましたので、項目立てをせずに、国際的な動きの一つとして、と表現しました。ただ、分量的にちょっと多めに言及する形になってしまったので、こちらの部分についてもご意見いただけたらと思っております。

次に6ページをご覧ください。6ページの(3)のデジタル化の進展という部分ですが、2段落目で、「一方で」と始まる文章の中で、デジタル化の進展で生じる格差について言及しながらも、対面の価値が再認識されたというような、ポジティブな要素も書いてあり文意があべこべになっていたものですから、こちらはネガティブな要素を、マイナスの要素を述べる段落とさせていただきます。併せてその次の段落も、表現の整理をさせていただきました。

同じページの一番下の段落について、NPO法人の数について書いてある部分ですが、元々「新型コロナウイルスの影響によってNPO法人の活動自体が停滞したこと」ということで、説明をしていた中、「停滞しただけではなくて、解散する法人も増えているのではないか、そのあたりの記述も入れたらどうか」というご意見をいただきましたので、確認のところ、解散件数が実際に増えていることがわかりました。資料2の一番裏面をご覧ください。内閣府のホームページから、実際に解散件数がどのくらいあったのかを出してみました。

一番下の、静岡市が所轄庁となっているNPO法人の解散数は、元々の件数自体があまり多くないものですから、これだけで増えた、減ったは言いにくいのですけれども、静岡県、全国の数字を見ますと、年によって増減はあるものの、解散件数というのは増加傾向にあるようなので、答申の中では、解散する法人も増加しているという表現を追加させていただきました。ただ、このデータだけではコロナの影響によって、解散件数が増えたところまでは明確に読み取りができないので、答申の6ページに戻っていただきまして、「役員の高齢化による継続が困難になったことや、コロナの影響によって」というような例示を出した上で、「活動自体が停滞したこと等を背景に、解散する法人も増加傾向にある」という表現にしました。

続きまして、少し飛んで9ページをご覧ください。9ページは静岡市の自己評価の項目になっていますが、下の方の基本目標について(1)市民活動センターの機能強化の部分で、2段落目の最後、センターの利用者数が以前の6割ほどにとどまっていることが課題ですという表現をしていますが、コロナの影響が不可抗力な部分もあるので、「課題」とまでは言わずに「留まっている」でいいのではないかとご意見をいただきましたので、その内容で反映しています。次の段落について、センターの方で、スタッフがオンラインのスキルを身に

付けて、利用者の方にノウハウを提供しているというような表現がありますが、これに加えて、オンライン配信を行うための機材の配置とか、そういったインフラ的な整備にも取り組んでいることを言った方がいいのではないかというご意見いただきましたので、それについても反映しております。

次に 15 ページをご覧ください。15 ページの（２）静岡市による自己評価を受けて、という部分ですが、1 段落目の最後、市民活動は数値だけでは完全な評価はできないと書いてありますが、どのような場合であっても完全な評価というのはできないのではないかというご意見をいただきまして「適切な」という表現に変えさせていただきました。

同じように 2 段落目の最後のあたり、設定されている目標は「適当な」数値なのか、という表現でしたが、目標値は「妥当な」数字なのか、に表現に変えさせていただいております。

続いて 16 ページをご覧ください。16 ページの真ん中に目指す姿があり、その下の段落、「市民活動」というと高い使命感を…」と始まる文章で、ここも横線を引いてある部分を変えたのですけれども、元々「市民活動は人々の生活を支え豊かにしていくために、行政や企業がカバーしきれない隙間を埋めていくもの」という表現をしておりましたが、ご意見の中で「当事者は結果的に隙間を埋めているということがあっても、自分たちが埋めているという意識はないのではないか」といったご意見をいただきましたので、赤字となっている通り、「市民活動は行政や企業家庭等とともに人々の生活を支え、豊かにしていくための重要な営みの一つである」という表現に変えさせていただきました。

その下の枠の中ですね、黒い丸が 4 つあるうちの二つ目、「一人ひとりの社会の営みの中で…」という部分ですが、「少しの公共心を持ち」というところが、こちらも必要か、というご意見いただきましたので、確かに公共心という言葉も少し硬いものですから、「一人ひとりが社会の営みの中で支え合い役割を持って活躍できる社会」と修正しました。

次に 18 ページをご覧ください。18 ページの施策の柱 1 の中の、下の方に四角で囲ってある施策の方向性（案）という部分について、三つ目の矢印に「シチズンシップを育むための学習機会の創出」という言葉がございますが、こちらについてもシチズンシップという言葉、カタカナの言葉が唐突に出てくるので、読む人にとってどうかといったご意見をいただきましたので、これについてもご審議いただければと思うのですが、事務局として注釈とか説明書きをつけるとか、他の言葉で言い換えるとか、そういった対応が考えられるかなと思いますが、シチズンシップ自体、いろんな使われ方をされている部分もございますので、その辺も踏まえてご意見いただければと思っております。

同じく 18 ページの施策の柱 2 の 1 段落目の最後、横線で引いてありますが、「立派な」市民活動ですと書いておりましたが、「立派」という表現は不要というところで削除してございます。

最後に 19 ページです。施策の柱 3 「創る・実現する」の説明ですけれども、施策の柱 1 あるいは 2、目指す姿も含めて、市民活動自体は、自然な、というか、日常的なところに落とし込むというような形でこの協議会で話を進めていたところだと思うのですが、答申の表

現について、「市民活動の目的自体を社会課題の解決に絞っているような表現になっているのではないか」と、ご意見をいただきましたので、こちらについても皆さんのご意見を伺いながら修正をかけていきたいと思っております。

事務局からの説明は以上ですが、施策の柱3の部分に関して、木下委員からご提案をいただいていた部分もございましたので、もし補足説明というか、意図みたいなものを教えていただけたらと思うのですが、お願いできますでしょうか。

(木下委員)

木下です。よろしくお願いします。施策の柱の3番目が、1から順番に読んでいったときに、1と2は市民活動を私達の営みの中に、という形でかなりハードルを下げて、幅広いイメージを持たせてきたのに対して、3番目に急に問題解決か価値創造かっていう形で、焦点がすごく絞られた上に、かなりハードルが上がっている印象を受けます。私もよく接しているNPOを実際にやっている方たちの悩みに対応している形で、もちろんこの中身自体は否定しないのですが、1、2と来たときの3番目に「創る・実現する」という名称で出てくる内容として、1、2、3とステップアップしていくと、市民活動が広がって、組織として安定してきたら、何か社会に貢献してないと駄目です、みたいに思われていると、ちょっと違うような気がします。必ずしも資金を調達しないと市民活動が成り立たないわけでもないと思うのですが、やっていくと必ず組織を大きくして資金を調達して、何か課題にアプローチしていかなきゃいけないという意味合いにとられてしまうとしたら、3だけ、1からの流れからすると、急に方向性が変わって、実際に施策として支える中身としては必要な要素だと思うのですが、表現の仕方とか、流れの1、2、3というのが、発展させていく流れとして見せるのかとか、そういうことの出し方の工夫があった方がいいのかなという印象を受けました。基盤強化のための支援というのはもちろん必要としている団体がたくさんいるのですけれども、必ずしも組織を大きくしなければいけないとか、そういったことは市民活動全般に言えることとも限らない。もう少し3番に関して、こういったところにアプローチしない団体もうまく含めた内容にできた方が、1、2からの流れからいうと、いいのかなという印象をもちました。

(事務局)

ありがとうございます。木下委員おっしゃられたように、課題解決型、価値創造型という二分されるような表現について、意図としては課題解決だけじゃないことを言いたかったのですけれども、この表現自体が一定の枠組みに当てはめてしまっていましたので、その辺も踏まえて、ご議論をいただければなと思っております。事務局からの説明は以上です。

(山岡会長)

それではただいまの事務局からの説明に対してご意見、ご質問などお願いいたします。発言

の際は会議録作成の関係でお名前をおっしゃっていただいております。今回の答申がこういう形で、形を伴って出てきたということ、それから、皆さんからも協議会だけではなく、メールも含めてご意見をいただいて、それをほぼ取り込む形で、修正を加えて提示していただいたと、そういう状態かと思えます。今、木下委員からもご説明ありましたけれども、事務局の説明、どこの部分に対してのご質問でも構いませんし、特にメール等でご質問、あるいはご提案をいただいた方におきましては、書ききれない部分の補足説明ですとか、あるいはご提案に対する事務局の修正案に対する受け止めとかそういったことも含めて、自由にご発言いただければと思います。いかがでしょう。川村美智委員お願いいたします。

(川村美智委員)

川村です。事前に意見を送付しておらず申し訳ないのですが、現状認識の(2)の「本格的な少子高齢化・人口減少社会の到来」について気になった点があります。その記述自体は良いと思うのですが、例えば税収が減るということで、自治体の職員が減少する一方、業務量は増えていきます。つまり、地域で福祉ニーズがすごく増えてくるのに対して、行政の担い手も減っているし、住民側の担い手も減っているということが現象として出てきているので、少子高齢化ということが、市民活動にどういうふうに影を落とていくかということに触れた方がいいのではないかと。人口も減れば税収も減るし、それによって市の職員の数も減っている。だけど、高齢化が急速に進むので、ひとり一人に手厚いケアが必要になってくるわけです。そういうときに市民活動として、どういうことができるのかということ、ここで言うか、これからの計画のなかで、足腰の強い市民活動とか、そういうことに触れていくといいのかなとか。迷うところではありますが、現状認識の中にそういう部分を入れたらどうかと思いました。

(事務局)

公共サービスが今までどおり、同じようには成り立っていかなくなっているということ表現するようなイメージでしょうか。

(川村美智委員)

施策の柱3で先ほど木下委員が言ったところ、施策の柱3の2段落目に「公共サービスは行政が担うものとされていたことは過去の話で、今や市民活動なしでは成り立たない」ということが書かれています。これは押し付けではないかと思っていて、やはり市全体がこういう状況にあるから、みんなの力を借りなければ運営が難しいみたいな、主体のあり方みたいなものがかかってくると思ったところです。それから最初の、社会的な課題の分析のなかでそういうことがあれば、施策の柱3のなかに結構連動しているのではないかという意味合いもあります。

(事務局)

ありがとうございます。行政の状況を説明するのであれば、例えば市の予算上、扶助費がどんどん大きくなっていますよとか、職員数が減っているというデータというか数字は当然出せるというか、そういう状況になっていますので。そういったものを切り口に公共サービスというか、自治というか、そういった部分がこれからもより求められていますというようなイメージなのでしょうか。

(川村美智委員)

私のニュアンスでは、市民活動が関わっている領域が福祉とか、住民の健康づくりとか、そういうところにオーバーラップしていくような気がしています。だから、ずっと、会議の中では市民活動がものすごくハードルが低くて、普通のサークルも市民活動であるという考えできたのですが、一方で、地域の状況としては、市民活動は福祉とか、人々が安心して暮らせるようにと、そうすると、経済なども関わってくるのだけど、そういうところを少し入れこんでもいいのかなど。木下委員の言うように、難しいこととか課題解決ということとはちょっと違うのですけれども、市民活動は生活とすごく密接なのだということをうまく伝えられたらと思いました。

(山岡会長)

関連して、4ページの今の説明の少子高齢化の後に、家庭の状況について触れられていて、そこに「ますます共助や公助の必要性が増しています」と書いてあるんですけど、このこともあわせて、市民活動の支え合い的な側面の重要性というのが今まで以上に高くなるとこのことですよ。支え合いを共助と言い換えていいかどうかというのはありますけど、そのようなことだと思うんですよ。ここで公助が入っているのがどうしてかわからないんですけど、今の話だと行政が今まで担ってきた部分っていうのがおのずと小さくなってそれは公助の部分小さくなるので、共助を担っている市民活動の重要性がより増していくみたいな。そういったことがここで少し含まれればいいのではと思います。

(事務局)

ありがとうございます。先ほど柱3の、公共サービスが云々という記述は自分も後から見返してみても、やっぱり行政都合のような印象がありますので、今、会長にまとめていただいたような、データとしては人口減少とか、世帯の状況みたいな部分を出しながら、共助、支え合いという部分に関しては必要性が増していて、その領域について、市民活動が「必要とされる」みたいな感じもちょっとよくないのかなという感じはするんですけど、「求められている」というような表現ですかね。そのようなイメージでここについては表現を変えさせていただきます。

(片井委員)

片井です。今の考えで、なぜ職員が減っているか、公共サービスが減っているかというのは、理由をはっきり書かないと、財政上の問題だろうと思うんですけども、この理由を表すために、少子高齢化、人口減少が財政上にどう影響するかというのも言うておかないと、人を増やせよ、金はこっちに回せばいいじゃないかというような話も出てくるかもしれないので、そこら辺も入れた方がいいのかなと。それと、今の話とは別ですけど、ずっと考えていて、この計画は誰向けなのかなとちょっと考え、行政向けなのか、一般市民向け、活動している人だけに向けて、あるいは活動していない人に向けてなのか。それによってちょっと表現も変わるかなと。行政に向けるとなると、このような行政の話でいいのかな、と思ったりしたのですけれども。以上です。

(山岡会長)

誰向けかということに関しては、私は市民向けというふうに思って、それは活動している市民だけじゃなくて、これから活動するかもしれない市民も含めてというふうに考えております。事務局や皆さんご意見があれば。

(事務局)

事務局からですけれども、会長がおっしゃられたように、市民の方に向けてのものになっています。行政の取り組むことを記す計画なのですけれども、行政だけがやっていくものではなくて、行政としてはこのようにやっていきますということを市民の皆さんに伝えるための計画なのかなと思っています。出てくる取組とか目標とかについてはあくまでも行政がこういうふうに進めていきたいよということなのですけれども、それを計画書という形にするのは、やはり皆さんと共有するためにあると思います。

(片井委員)

行政はこういうふうにするけれども、皆、一緒にやってねというふうな形の計画。

(事務局)

そういうイメージです。

(片井委員)

そうすると、行政に対して、行政こうやってよ、という感じの内容でもいいのかなっていう。はい。わかりました。

(池田委員)

池田です。片井さんの意見に補足してなんですけど、先の話にはなるんですけど例えば、浜松市の市民協働の基本指針というのがあるんですけど、それは住民向けと、中高生向けと、市民活動団体向けというのを概要版で全部分けて出しているんですよ。概要版を作った場合ですけどね。なので、やっぱりそういうのをちゃんと見やすく、それも大体1枚になっていたりするので、出来た後の話なんですけど、対象向けに、バージョンで全部中身が違うんですよ。そういったものを出せば、そのあたりももっと伝わりやすくなるのかなと思いましたがので補足まで。

(山岡会長)

大事なことですよね。そもそも関心のある人はこの計画を読むかもしれないけど、まさにこれから関わってほしいという人が読むかというとなかなか難しい。アプローチの仕方を考える必要はあると思います。他いかがでしょうか。

(田中委員)

18ページの施策の柱2の「動き出す」のところなんですけど、意見を表明するというのも、「動き出す」の一つかなと考えたら、パブコメで自分の意見を提出するというようなことも、この文章の文言に入っていたら、今までと違ってそういう意見をすることも市民活動の一つなんだと伝えられるかなと思って。あと、ここにはのらないと思うんですけども、パブコメの書き方講座みたいなものも、市民自治推進課でやっていただいたらもっと広がると思います。以上です

(事務局)

ありがとうございます。パブコメについては庁内でも議論になるんですけど、パブコメ自体はたくさんやってはいるんですけど、それが知られていなかったりとか、あるいは意見がたくさん集まったけど、その結果はホームページとかに載せているだけで、なかなか積極的な発信ができてなかったり、そういったことは課題としてあります。関わり方の一つとして意見表明するというのも、ニュアンスとして入れてもいいかなと思います。あとは、この計画自体もパブリックコメントにかけることになるので、そのタイミングで何か、書き方講座かどうかわからないですけど、意見をたくさんもらえるようなものは考えていきたいと思っています。

(田中委員)

私、ひとり親の方で、法制審議会の法改正というところで、意見を出したいけど、書き方がわからないというのがすごく多くて、やっぱりそれって思いがあっても、ちゃんとした形で届けないと意味がないものになってしまうと思っているので。提言させてもらいました。以上です。



(山岡会長)

「動き出す」というところでのパブコメ、意思表示もあるかもしれないですけども、市民活動のなかでアドボカシー的な活動をしている団体だと、もしかすると施策の柱3のほうがいいかなという気もしますけど、どこにあっても、そういう社会を変えていくためのアプローチがあってもいいのではないかと思います。他はいかがでしょうか？

(北川委員)

北川ですけどよろしいでしょうか。

(山岡会長)

はい。お願いします。

(北川委員)

意見を少し述べさせていただきたいと思います。いただいた資料の15ページにあります静岡市による自己評価を受けてというところで、記載がありまして、これは静岡市の評価を受けて協議会として、このように提案しますというようなことが書かれている、重要な点かなというふうに思っているのですけれども、ここに書かれている記載の内容はまさにこの通りだと思います。

そして前回のときも、いろいろ第3次の振り返りについて皆さんと話をさせていただく際にこの辺の話が出ましたし、おそらく今日も、この評価のあり方ということで、意見交換があるというのも聞いておるので、この評価をどうしていくかというところをですね、やはりある程度、頭の中にしっかりと置いておかないといけないのかなと思っています。

ここの記載にあるような、数字データだけでは不十分なものになりますと、その通りだと思います。また一方で、定性的なデータを積み重ねて、というような記載によって、総合的な評価を行うといった評価方法も検討していくという記載があって、内容は、なるほどとは思いますが、これを具体的に、どのように総合的に、定性的なものと同量的なデータを組み合わせて最終的な評価にしていくのかという話になると、これは相当難しい話だと思うのです。ですから、ここの記載にとどまってしまうような気がします。おそらく第4次も終盤を迎えたときに、振り返るときになると、さてこの第4次の計画を振り返って、皆さんどう評価しますかと言って、また第3次のときと同じような話の繰り返しになってしまうかというような印象を受けます。従って、数字だけでは不十分なものであるというのはその通りだとは思いますが、やはり公的な形でこういった目標を掲げる以上、誰にでもある程度わかりやすい成果というのを示すというのがやっぱり一つの方法なのかなというふうに考えると、やはり評価をある程度見据えた第4次の計画を作っておく必要があるのかなというふうに私は感じました。記載の内容としてはこれでいいのかなとは思

のですが、このバックグラウンドとしては、ある程度この記載があるような総合的な評価というのはどうやっていくのかという具体的なイメージをある程度持った上で、こういったものを作り上げていかないと、絵に描いた餅のような話になってしまわないのかなというところを感じました。意見です。

(山岡会長)

ありがとうございます。私も読んだときに、北川委員とほとんど同じようなことを思いました。総合的な評価がそもそもできないでしょう、できないのに書いてしまっているのか、しかも、ここまで書くと、じゃあやりましょうという話になると重いなど。だからこの書きぶりももしかしたら少し変えた方がいいかもしれないなと私は思っております。これだと、定性的なことも併せて総合的な評価をやっていきますよと言っているような感じに受け取られてしまうので。数値だけで評価できるとは思っていないよということはとても大事で、他方で定性的な部分をきちっとフォローしていくというのも重要なことで、だからと言ってそれで総合的な評価をきちっとできるというわけでもないなというふうに思っています。とはいえやっぱり行政の施策の中でやっていることですから、北川委員がおっしゃるように、わかりやすく設定していく、ということも必要かなと思います。すこし考えたいと思います。事務局の方から何かあれば。

(事務局)

事務局です。評価の仕方について、この後またご意見いただきたいなと思っていたのですが、第3次計画の反省としましては、前回も少し議論いただいたように、掲げている数字と市の市民活動の施策というのが、全体がきちんと連動しているのか、評価できるのかという部分については考えていかななくてはいけないかなと思います。もう一点ですね、第3次の計画をご覧いただくとわかるのですが、評価の仕組みみたいなもので言及されていないので、計画の中で評価の仕方というか、例えば協議会で議論をしていただくのか、別の機会を設けるのか、そういった評価の仕組み、仕方みたいなものは計画の中でちゃんと言及した上で策定をできるようにしていきたいなと考えております。ありがとうございます。

(山岡会長)

川村栄司委員お願いします。

(川村栄司委員)

今の15ページの関係ですが、資料2の事前の意見集約の最後に書いてあるんですが、評価に関する記述が重要で、目標数値ありきではないことを明言された点は素晴らしいと思いますというのが私の考え方で、どうしても行政の内容ですね。いろんなところに報告しなき

やいけないということなので、わかりやすい数字で表すのがやりやすいと思うんですけど、そのところを数字ありきではないよということをはっきり謳われている点を私は評価していきまして、そうは言いながらも、15 ページの3段落目ですね、数値目標を立てること自体は、行政の仕組み上やむを得ない部分もありますがという一文が入っているんですよ。つまり数値目標は、それが全てではないけれど、立てざるを得ないということをここで言っているわけですよ。資料3のですね、横長のカラーの意見交換用資料ですが、これにも「定量的な視点」とあえて入れられているのは、その辺が役所の苦しいところで、数値目標は入れざるを得ないんじゃないかと、というようなところがあると思いますので、私は15 ページはこのような表現でいいのではないかと考えています。むしろ気になったのはですね、同じ3段落目で、定性的なデータ（ナラティブ）というふうに書いてあるんですが、市民活動とか行政の方あるいは企業の方はこの「ナラティブ」はなじみのある言葉かもしれないのですが、私はあまりなじみがなくて、要するに定性的な部分で、その話として伝えていくと、そういう意味で理解してるんですが、木下委員がシチズンシップという用語について問題提起をされていて、今日ご審議をお願いしますとなっているんですが、そういうカタカナ語というんですかね。この辺りですね、注釈があったほうが良いと思ってまして、シチズンシップにつきましては、いわゆる上位の計画であります第4次静岡市総合計画の案の中に、一番後ろに用語集が載ってまして、そこに書いてあるんですよ。なので、例えばそれをそのまま持ってきて、ここに注釈を入れる。それからナラティブについては4次総のなかには登場しないものですから、用語集にもないので、言葉の意味を加えたらいいのではないかと思います。以上です。

（山岡委員）

ありがとうございます。事務局はよろしいですかね。

（事務局）

シチズンシップという言葉について、今回の答申でどう表現するかということにあたり、今ご意見あったように、静岡市の第4次総合計画の方では説明書きがありまして、「ただ住んでいるだけの住民から一歩踏み出して積極的にまち作りに関わろうとする公共意識」という表現ですが、今行政としては総合計画の上ではこのような意味合いで使っているということなのですが、今までのこの協議会の中での議論だとか、いろいろお話を聞いていく中では、意味合いとしては、この説明内容もそうなのかもしれないけど、それだけではないような印象を受けていますので、説明書きをつけるのか、別の言葉で言い換えるのかというのは少し、皆様のご意見をいただけないかなというふうに思っております。

（山岡会長）

ありがとうございます。他いかがでしょう。

(川村美智委員)

川村です。政策の柱4で、言葉をこう変えるということではないのですが、皆さんに投げかけたいと思うのが、昨年度まで教育委員をやっていた関係で、今、運動部の部活動を地域でやるということが取り組まれていて、これから文化部も地域でという方針が文科省から出ています。そうすると受け皿の多くは市民活動をしている団体ということになります。今、庁内での管轄が市民活動の分野になっているわけですが、教育分野とすごく関わってきます。それから健康づくりの分野でも、S型デイサービスのように市民の中で公民館を利用した健康づくりを既に何十年もやっています。施策の柱4の説明部分のうち、「市と市民活動団体という協働の形だけではなく、あらゆる主体による多様な形の協働を実現していくこと、市が全庁的な取組として協働に対する理解を進め、変化に対応できる仕組みをつくる等、」という表現がありますが、具体的には、教育の分野とか福祉の分野とか複数の分野が緩やかに繋がっていった情報共有されているような取組が、行政としては必要だと思っています。そういうことがこの文面からは読み取りにくい感じは受けました。何か工夫して盛り込めないかと思います。

(事務局)

ありがとうございます。全庁的な取組として、協働に対する理解を進めるということに入ってくるのかなと思うのですが、この計画を進める上での庁内の策定組織がございまして、各局長レベルのもの、その下に関係課の係長クラスの検討会がありますので、そういった部分では、各局の意見を聞きながら策定を進めていくということと、あとは今まで、全庁的に協働事業について、各課に対して市民活動団体と協働した事業は何かあるかという調査を毎年して、モニタリングしているのですが、今、自分でも気がついたんですけど、調査結果を各課からもらって、市民自治推進課が確認するところで終わりになってしまっているんで、それをちゃんと全庁的に共有することとかはやっていくべきだと、お話を聞いていて思いました。

(山岡会長)

例えばこの文章のなかで、端的に福祉とか教育とかってということも入れたらどうかっていうご提案でいいですね。

(川村美智委員)

入れたほうが、ここが一つのハブというか、ここで全部わかるのではないと言うと変ですけど、これは全庁的に関わっているということイメージしてもらうには少し具体的に、教育、福祉、健康、地域活性とか・等となるといいかなと思います。

(山岡会長)

なかなか難しいですね、具体的に書くと、じゃあそこに書かれてないところはどうかと、例えば産業とか経済とかとのかわりもこれから重要になっていくと思いますし、ただ、「等」ってつけてればよいかなと。もし事務局からあれば。

(事務局)

市民活動の部局だけじゃないということ表現するような例示みたいなものを入れていきたいなと思います。

(山岡会長)

そうしましたら、時間の関係もありますので、最初に木下委員からご提案のあった施策の柱3のところを、あまり触れてないので、ここで皆さんご意見出し合ったほうがいいかと思いますが、いかがでしょうか。

(山本副会長)

山本です。お願いします。私、今日この事しか考えてなくてですね、多分何人かの方は、ぱっと見て問題解決、価値創造って入っていた時点で「えっ」て、思ったんじゃないかと、市民活動はそういう役割をもって生まれているものじゃなくて、行政よりもさらに、人がたくさん群れて集えばいいし、何かはじまる、お互いのためという。そういう、立ち上がりは非常に素朴で根源的なものだと思っているので、役割を押し付けられても困るというのは、思われた方もいて、じゃあ、だからといってどう表現するかっていうのは、とても難しいことだなとは思ったんですけども、これ多分、書いておられることの文意はほぼ一緒に、言葉が違うのだろうと思いつつながら、先ほどから考えていました。池田委員から紹介いただいた浜松市の例を、今ざっと読んでいたんですけども、浜松市が静岡市と違うのが、協働を起こすっていうのがすべての軸になっているんですよ。市民活動を育てるじゃなくて、協働を起こせる存在になるために、行政は、市民は、企業は…という表現の仕方、同じようなことを言って、ある種、解像度は静岡市の方がちょっと高い部分もありながら、根源的に考え方が違うんだなということがわかり、そこを主体に置くと、この3の部分の部分がそういった協働を社会的に、主体と一緒にするには、どうしたらいいのだろうという、それをもっと支援してくれるとか、ステップアップし、信頼される、責任を負える存在になりたいので、なぜなら協働のために、地域のために、それにはどういうパワーアップが、もしかしたら筋力をつけるパワーアップが必要、なので、それを支える、行政にも支えて欲しいっていう文脈になってくるのかなって。浜松市の書き方に書き換えろ、ではないんですけども、そういうふうに視点を変えると、ここの表現が違ってくるのではないかなと思いました。どうしても市民活動がステップアップしていくとなると、自由なサークル活動みたいな状態から、例えば行政事業を請け負えるかどうかとなると、書類が作れるとか、ちゃんと

事務所があるとか、代表がしっかりしていて責任の所在がはっきりしているとか、そういうところが求められてくるので、こういう基盤強化とかですね、そういう文脈になってしまうのですけれども、今、こういうふうに変えなさいとすぐ言えないのですが、市民活動を主語にして私達はどのような存在になるべきなんだという宣言みたいなものを意識してここを書くと、違う表現になってくるかなと思いました。そう書くと4が自然なんですよね。繋がって、社会を変える、本当にアクション、目に見える形にしたいんだっていうところに。すみません、ここ5分で考えついたことですが、以上です。

(事務局)

ありがとうございます。ご意見を伺って、開けたような感じもしつつ、自分の中では消化しきれない部分もあるのですけれども、この柱3の中で、今までのご意見とかを聞いている中で、先ほど申し上げたのですが、少し押し付けているような部分については直しが必要かなと思っていて、例えば2段落目の、「公共サービスは行政が担うものとされていた」とか、そういう部分についても、さっきの支え合いみたいな話の中で、「社会において求められる支援の幅が広がり」とか、行政がこうだからというよりは、社会がそういう状態になっているというような表現に変えたりとか、あとは、冒頭の「社会課題の解決に向けて」というところは、やわらかな表現で、それぞれの「目的の達成に向けて」とか、そういう言い換えができるかなと思っていましたのですけれども、山本副会長がおっしゃられたような、協働の考え方をどう捉えて、どういうふうに書くかというのは、今、この場でこうしますということをなかなか思いつかないのですけれども、逆に、今の、協働という視点について、また皆さんの方で、ご意見いただけたらなと思っています。

(山岡会長)

社会的課題の解決とか価値創造とか、それらを目的にしている団体もあるし、そうでない団体もあると思いますが、どんな団体も必ずミッションとか、目的は少なからずあると思うんですよ。だからそれぞれのミッションや目的に向けてとか、という書きぶりにしたらいいんじゃないでしょうか。そのミッションや社会課題は行政からの押し付けじゃなくて、それぞれの団体の目指すものを形にしていく、そのためにはある程度ステップアップが必要だと、そういうことでいいんじゃないですかね。ステップアップしていくことを目指すかどうかはもちろん団体に委ねられる、そうだとすると多少なり対象が絞られる、この柱の3、対象が絞られるっていうのは、おのずとそうなるという側面があるのかなという気がしています。いかがでしょう。

(池田委員)

池田です。あまり考えがまとまってないので、発言するのもどうかと思う部分もあるのですが、一つ、認識の中で、今この施策の3に、公共サービスはという話が出てしまっている

んですけど、市民活動とかで補える部分はその代替ではなく、豊かな暮らしを生み出していくことに近いのかなと思っていて、担うという言葉を使ってしまうと、やっぱりその代替として期待される部分大きいので、そこは気をつけた方がいいのかなと思いました。それこそ先ほど山本副会長がちゃんと言ってくださったんですけど、やっぱり浜松市さんのスタンスとはちょっと違って、私の受けた印象ですと、浜松市さんはそれこそ、様々な市民活動がある、そこに市民活動が入ってきたところでどう協働を進めていってより暮らしやすい世界にするかというところがあるんですけど、私が今までこの協議会に出させていた中だと、静岡市さんは、そもそも「The 市民活動」というものが柱にある気がしていて、それこそ、自治会などの地域活動も、当初はあまりそこに入っていなかったという流れがあるので、もし余裕があるのでしたら、一度そのスタンスとか、立ち位置とか、そこをどう持っていきたいのかという、ちょっと難しいかと思うんですけど静岡市としての運びたい方向性というのは示してもいいのではないのかなとは思いました。

(事務局)

ありがとうございます。静岡市の市民活動の捉え方というか、考え方については、大元になっているのは「市民活動促進に関する条例」がございまして、そこに市民活動の基本理念を記載してございます。計画をお持ちの方は、第3次計画の後ろの方に載っているのですけれども、「市民活動は、国及び地方公共団体の活動又は営利を目的とした活動によっては解決できない社会的課題を解決する役割を果たすものとする」というような表現がございまして、まさに池田委員がおっしゃられたような「The 市民活動」のようなものが根っこにあるのかなというふうに思っております。これだけではなく「市民活動は、市民が対話を通じて、相互に価値観を尊重し行うものとする」だとか「自ら意見を述べる意思又は機会のない者が抱える問題を取り上げ、見過ごされやすい社会的課題の解決に貢献するものとする」といったような形で基本理念として市民活動を定義というか、捉えているところがございまして、どうしても「The 市民活動」のような部分が出てきてはしまうのかなとは思いますが、今回の計画は、それを広げていくというか、そこへの参加のハードルを下げていくというか、そのような趣旨かなと思いますので、基本理念については今申し上げたような条例の部分なのですけれども、それをどのように捉えて、この計画に落とし込んでいくのかとていう部分になるのかなと。それを実現するためにこの4つの柱をどう表現していくのかという流れだと考えております。

(山岡会長)

今日、この後、4時までの時間の中で、評価の話もしなければならぬので、どこかでこの意見交換も区切らなくてはならないのですけれども、どうでしょうか。

(片井委員)

市民活動の課題解決というこの用語について施策の2、3、4とずっと入っている、2番のところにも、使命感を持って社会課題を解決する部分もありますが、本人ボランティアや市民活動という認識がなくても構いませんという、そこでも課題解決に取り組むという表現をしているし、3番は今、議論されているようなところだし、施策の4も、市民活動は社会課題の解決に取り組むものでありっていうように、条例の方も社会課題の解決的なことも表現しているみたいですので、3のところでは、社会的課題の解決というのは、その次のところで、問題解決型の活動だけじゃなく、スポーツや芸術の振興といった価値創造型の活動も含まれますってというような説明をここでしているんですけど、こういったことをどこか別のところにはっきり社会的課題の解決とは何っていうこともどこかに表現したらどうなのかと、ふと思いました。

(山岡会長)

他の柱との整合性を考えたらどうかと。それと条例とも。

(木下委員)

木下です。先ほどからのお話でかなりクリアになってきた面がありまして、要するに市民活動に期待することとか、こうあってほしいってことは極力表現せずに、皆さんがいろんな活動することをいかに幅広くサポートできるかっていうところに向けて行くべきで、ここに書いてある、動き出したときに、出会った困難とか、もう少しステップアップしたいって思ったときに、行政としてもそれを支えようとする準備がありますよということかと思えます。実はこれとSDGsの話が構造的に全く一緒なんです。SDGsを、ただ17目標があるので市民活動頑張りましょうっていうと、問題解決型に見えるんですよ。ただ、僕はちょっと書き直してもらったところで言いたかったのは、SDGsの目標16番のことで、市民活動の促進そのものが、社会課題の解決ですみたいな言い方ができるという、意味合いが逆転するというか、SDGsの目標1の貧困とか、目標6の水問題とかのために市民活動があるのではなく、16番などでは、市民活動そのものが活発になることが、持続可能な社会に必要な必要だって言われている。市民活動一つ一つが各目標に繋がらなさいとは言っていないんです。結局、市民活動自体は多様性が生まれていくかっていうところも一つのポイントだと思うので、その幅を狭めずに、どこまで広がっていくかみたいところに焦点を当てていくと、SDGsの表現の仕方とかも、施策の3の表現の仕方とかも、片井さんおっしゃったように社会課題の解決っていうことが、一つ一つの課題ではなくて、市民活動そのものが活発になって、いろんな活動が生まれることで自然と社会が豊かになるってことが社会課題の解決とか、ここまで言ってしまっていていいかわからないんですけど、そう言えると、少しわかりやすいのかなと、今、私の中ではそういう整理になりました。SDGsもそういうことを言いたかったんですけど、今、ようやく言語化できた気がします。



(山岡会長)

おっしゃる通りだなと思いました。ニュアンスがわかるように、嗅ぎ取れるようには書きたいです。

(山本副会長)

今の木下委員に、要するに大賛成です。私は書いちゃえと思うのですが。おっしゃる通りで、この目的を設定して、まるでNPOに序列をつけるような言葉を、そういうつもりは無いのはわかっているのですが、一切排して、それぞれの皆さんが最大限にミッション達成を目指している、パワフルな地域が静岡の価値であり豊かさですという、ここまでお話しして思ったのですが、私達自身も行政も、全部含めて、主語がおかしくなっているのかなと。浜松市の例がすごくよくてさっきから見ているのですが、若者とか市民活動とか事業者とか主語をちゃんと変えてるのですね。そこから見ると市民活動はどう見えるのか、地域とはどう見えるのかという、状態を目指すということと、その主体者で言葉が違う、見ている世界が違うけど、ちゃんとここに盛り込んでいることがとてもよく伝わっていて、静岡市と比べてどうこうではないですけど、静岡市ははっきりとそういうメッセージがちょっと見えないから、主語がバラバラしてしまい、まるで行政さんの文言を補完するようなことに私達もついついひっぱられてしまい、一番今回のここまで来て、まだまだ足りなかったところなんだなというのを感じたところです。木下さんや池田さんが言った、私達が最大パワフルになることこそが豊かさだという、それをもっと言葉の中に入れ込まれていくと、せめて今この状態で目指すところが少し達成されていくのかなと、そうすると、今期以降の協議会が、途中で修正がありますよね、そこに向かってやることも自然と決まってくるというふうに思いました。ありがとうございます。

(山岡会長)

ただ、今までの議論の中で、柱の表現を変えてきた、結果的に変わった、変わったってことよりも変わるようになったプロセスが大事だと思うんですけど、そのプロセスの中に今おっしゃっていただいたような、市民活動があることで社会が豊かになることなんだよ、というニュアンスがあるからこう変わってきたと私は思うので、バシッと言っちゃうと、もしかしたら、なんで、と説明を求められるとうまく説明できないところもあるわけじゃないですか、だけど、その要素とか雰囲気っていうのは、この中に入っているなっていうふうに改めて思いました。いかがでしょうかね。よろしいですか。事務局の方で確認しておきたいことがあれば。

(事務局)

今のご意見を踏まえて、NPO活動はこうだとか、こうあるべきだみたいな、あるいはそういう分類をするとか、序列をつけるような表現は排除した中で、市民活動そのものが活発化

することが、静岡市のためにじゃなくて、市民活動が活発化することが、結果的に静岡市でのより良い市民の皆さんの暮らしになるというような趣旨で、表現に修正をさせさせていただきたいなと思います。SDGsの部分も同様に、特出ししないと言いつつ分量が大きくなってしまっているのもう少し、今、木下委員がおっしゃられたような部分で説明をするようにしたいなと思っています。シチズンシップのことはどうでしょうか。少し表現を変える、あるいは説明書きを足すとか、もう少し広い意味の、例えば市民の意識とか、ちょっと大きい表現に変えるという方法もあるかなと思うのですけれども。そこだけちょっと最後にご意見いただけるといいかなと思います。

(山岡会長)

シチズンシップという言葉は、事務局の方から出てきたのでしたっけ。

(事務局)

同じ意味合いで表現していたかどうか分からないのですが、事務局からの提案にもありましたし、深野委員から市民意識の醸成という部分を入れた方がいいのではないかとということで、シチズンシップといった言葉もでました。ただ、行政が使っている言葉と同じ意味で指しておられるかはわからないのですが。

(山岡会長)

それに対しては、やめたほうがいいよという意見は少なくともないわけで、だから、あっていいってということだと理解していて、あとはそれをどう表現するかですけれども、総合計画の中にもこの言葉が使われているのであれば、そのまま使っているのではないのでしょうか。ただ、その唐突感があるとか、理解が、ということであれば、注釈が必要だと考えます。では注釈をどうするかとかどう説明するかはちょっと考えていく必要がありますが。皆さんいかがでしょうか。よろしければ、以上が答申についての意見交換ですね。今日が答申に向けて、最後の会議となるのでこの後は最終案を確認させていただくということになりますが、よろしいですか。

(事務局)

はい、もしよろしければ、今いただいた意見を踏まえて修正して、皆さんにまた共有しご意見いただきつつも、最終的には会長、副会長と事務局の確認でもって最終確定とさせていただければと考えております。

(山岡会長)

ここで、この答申についての意見交換は終わりにしますので、もうちょっとここに入れたかったとか修正したい等、そういうことがあれば、事務局へメールか何かでお寄せ頂いて、あ

とは、事務局と会長、副会長で確認するというので、よろしいでしょうか。

[異議なし]

(山岡会長)

ありがとうございます。

それでは次に、次第にはないのですけれども、前回議論にありました計画の評価の仕方についてご検討いただきたいと事務局から提案がありましたので、これについて事務局から説明をお願いします。

(事務局)

よろしくお願いします。事務局から説明をさせていただきます。

資料3をご用意させていただいておりますので、ご覧ください。先ほど少しお話が出ましたけれども、3次の計画の評価をどのように行うかという部分で達成度の確認が難しい中で、第4次計画について、どのようにその達成度合いの確認をしていくか、ということについて皆さんから意見交換というか、何かをまとめるとか決めるというものではないのですけれども、いろいろご意見いただきたいなと思っています。資料3については、今までご審議いただいていた、目指す姿とか、あるいは4つの施策の柱とそれに基づく施策の方向性について、これからの答申を市の方で受けて、この計画に落とし込んでいくのですけれども、答申の内容を計画に落とし込んでいくと、このような構造になるのではないかなと想定して書いてあります。施策の柱の左側にある「触れる・楽しむ」「動き出す」「創る・実現する」「つながる・変わる」、これについては市民の皆さんですとかあるいは市民活動団体の方々が主語の言葉で、それらの隣にサブタイトル的につけていた部分「市民活動のちょっとしたきっかけの創出」とか、これらが行政が計画の中で取り組んでいく部分かなというふうに考えております。

市民の皆さんが市民活動に触れたりとか、施策の柱1で言うと触れたり楽しんでいる、そのような状態になっていることを目指して、そのために市は、市民活動のちょっとしたきっかけの創出に取り組んでいく、また、どんなことを行っていかと申しますと、その隣、①市民への情報の広がりを支援すること②市民活動を身近に感じられる機会を創出すること。そのために市民による情報発信の支援とか、市民活動に対する興味・関心を促す場づくり、シチズンシップを育むための学習機会の創出と、こういう方向性で各種事業を進めていきます、という計画になると思います。このように、第4次計画を作ったときに、冒頭申し上げました、計画の進捗管理ですとか達成度合いを確認していく中で、どの部分を評価の対象としていくべきか、あるいはどう評価すべきか、その二つが論点としてあるかなというふうに思っていますので、それについてご意見いただけたらと思っています。一つ目の、どの部分を評価の対象にするかどうかなんていうことについては、議論があったように、市

民活動それ自体を評価するというのは、先ほどの話で、行政が期待しているような、ここまであってほしいというようなニュアンスになってしまうので、市民活動そのものを評価するわけではなくて、計画は、あくまでも計画に基づいていろんな施策を行政が取り組む中で、それらによって市民活動が実際に促進されたかどうか、その点が評価の対象になるのかなというふうに思っていますので、施策の柱1から4、「触れる・楽しむ」「動き出す」「創る・実現する」「つながる・変わる」と、これらの動きを促すために、市が取り組むことを計画に落とし込んでいるというようなイメージなので、それが市民活動に役立っているかどうかという点が、評価のポイントになるのかなというふうに思っています。

もう一つの、どう評価すべきかという部分については、この表の一番右側ですね、赤字で、「定量的な視点」と書いてあるところなのですが、個別具体的な事業が紐づいてくるのかなと思うのですが、例えば市民活動ポータルサイトの「ここからネット」を開設しましたという中で、何人に見られたのかとか、どのくらいの団体が使ってくれたのかとか、あるいは、市民活動センターを1年間運営しました、その間で何人が来場されたのかとか、お役に立てたのかとか、その辺は数字的にも毎年とか、定期的に取れるようなものとなっています。生涯学習施設の利用者とか、いろんな公共施設の利用者とか、講座の受講者数とかセンターの相談件数とか、そういったものは事業レベルで取れる数字なのですが、そういったものを総じて左側の、施策の方向性とか、基本目標に書いてあるような、市民への情報の広がりや支援ができたのかとか、市民活動を身近に感じる機会が創出されたのかとか、それらについて期待される水準までできたのかとかですとか、更に言うと、「市民活動のちょっとしたきっかけの創出」が達成できたのかとか、その辺を図ることについてはすごく難しい部分かなというふうに考えております。

実際に3次計画に関して、前回も議論ありましたけれども、施策の柱に対する成果指標については、3次計画の柱1は「知らせる」なのですが、市民活動センターの来館者数と、市民意識調査の市民活動に参加している人の割合の二つが指標となっているのですが、市民意識調査はともかく、やはり来館者数だけ取ったとしても、事業としてのレベルは評価できるものの、「知らせる」ということそのものの指標としてはやはり、センターだけではないよね、というような考えもあると思いますので、第4次計画でいうと「ちょっとしたきっかけの創出」とか、こういったものの達成度をどのように測っていくか、事務局の方で悩んでいる部分でございますので、こういった測り方はどうかという指標の案でも構いませんし、評価の仕方とか、あるいは数字だけじゃなくて、前回協議会で出たようないろいろな市民活動のエピソードを積み重ねていくといった方法に関して具体的にこういうやり方はどうかとか、その辺のアイデアを今日は自由にとり、いろんなご意見をいただきたいなと思っていますので、それを踏まえて、またこの計画に落とし込んでいくときに、評価の仕方についても入れながら考えていきたいなと思っています。問題提起というか、問いかけがすごく雑駁なのは承知なのですが、皆さんの自由なご意見をいただきたいなと思っています。事務局からは以上です。

(山岡委員)

ありがとうございました。今のご説明に対してどうぞ自由に、答申に入れるとかそういうことではなく、今後のことですので、いかがでしょう。田中委員。

(田中委員)

田中です。この定量的な視点で、事業レベルでとれそうな数字というところが、対団体で、個人の小さな活動が反映されにくいと思いました。感想です。

(山岡会長)

例えば、こんな把握の仕方はどうかあれば。

(田中委員)

代替案ですね、そうであれば、例えば、この館を利用した団体に対して、アクセスする、利用した団体の人に毎回毎回アンケートを、私、こんな言い方失礼なのですが、ここからネットを使ったことは1回もないです。だけどうちの団体で、高校生とか大学生もいっぱい手伝ってくれているので、だったらうちの団体にどういう人が、どういう属性の人が何回くらい手伝ってくれましたかっていうようにしてくれた方がよっぽど正確な数字が出るかなと。

(山岡会長)

それを全ての団体にやるのは大変だと思いますが、いくつかでも、具体的にこういうことが起きているんだということ把握しておくということ、それと数字を合わせて評価に用いるということですね。

(山本副会長)

山本です。田中さんが言ってくださったので、かぶせますけど、私はこの定性的な視点をどうとるかといったときに、ここからネットしかないと思うのですが、ここからネットがそういうインフラになっていないので、とても、いくつかクリアしなきゃいけないことがあるっていうのが、ちょっと発言をためらうところですが、やっぱりポータルネット、情報の集積、メディアの一つとしてのここからネットがアクセスしたいところになっていて、かつ、活動の実態とか、それで心躍ったこととか、解決されたこと、私はこれで助かったよっていうエピソードがあれば、皆出したいと思うのですが、それが盛り上がっているのが一番、仕組みも機能も使われていて、かつアクションがよく目に見えるという、揃っていく、そこから多分、市や私達もそのアクションを見る化されたもので、次こういうことをすればいいのかな、ここと一緒に組みたいなって見えてくる、創造がどんどん生まれていく、ということになると、評価しようというのもすっ飛んで、そういうことも多分あんまり考えな

くても、ああ静岡いいことやっているんだな、もしくは時々、耳の痛いご意見をいただいたとしても、解決するにはどうしたらいいのかなという格好になっていくのかなと、思うのですけれども、それにはちょっともう1回、ここからネットを修正するのか、設計し直すのかわかりませんが、考えなきゃいけないことで、発言をさせていただきました。

(池田委員)

池田です。私よくいろいろな講座に呼ばれて、話をさせていただくのですが、定量的な視点というのはすごく大事にはしているのですけれども、結局、ターゲットというものがちゃんと定まっていない中で定量的なものを出すってというのは非常に危険だと思っていて、ましてや、今回、施策の柱として4つ出した中で、広がりとかというのが、かなり大事にされているのかなと思う中で、定量的に広がりを示すってすごく大変になっていくだけで、例えばここからネットにアクセスした人が、同じ人がいちいち10回アクセスしたってものを判明させないと、ちゃんとそれが広がっているかどうかって言えないのですよね。なので、やはり定量的な視点というのはあくまでも参考値にしかならないと思っていて、そういったものとして捉える必要性というのをすごく思っているのですね。そういう中で、今回は他市の事例が多くて申し訳ないのですが、東近江で「環境円卓会議」というのをやっているのですけれども、それこそ、すごく市民に開かれた場で、市民が様々なことを協議できる場所っていうのを設定してやって、そうすることで、定性的な視点をちゃんと評価として繋げていくということをやられている市なんですね。やはりそういった、今、例えばこの協議会は、どちらかという、私の感覚からすると、行政に対しての協議会なんですね。ただ私達がターゲットにするべき市民っていう方は本当、市民と一緒にこう、市民活動ですか、市民活動は市民と一緒に活動されている方で、多分こういった場所に来ない方、そういった方たちが、よく活動できたなって思える土壌を作ることが今回の計画に作ったことなのかなと思っているのですね。なので、できればそういった円卓会議じゃないのですけれども、各市民活動団体のトップランナーであったり、企業であったりもそうなのですが、そういった様々な環境下にある人たちが、自分たちの活動とかに関してちゃんとオープンな場で広く言えるような場を持って、それをもとに例えばこの協議会とかで私達の計画はちゃんと影響したかなっていうことを検討するような場というのがあってもいいんじゃないかなと思います。

(北川委員)

北川ですけれども、よろしいでしょうか。私が考えますのは、やはり先ほど、どなたかからありましたけれども、第4次計画って誰のためのものなのっていうお話の中で、一般の市民、既に市民活動されている方も、あるいはまだ活動されていない方も含めた一般市民の方が、主語ですというお話があったと思います。そういう意味から考えると、やはり既に活動されている方以外の方も含めて、実態が把握できるような評価が本来あるべきだと思います。そう

という意味からすると、既にある定量的な視点、この表にあるようなものでは、やはり計り知ることはなかなかできないのかなと思いますので、そういう意味から、やはりコストとか手間とはかかる話にはなるのですが、最終的なこの4つの施策が、具体的に一般の市民の人たちにとって、どのように感じられているか、というものを定点的に押さえていくことも必要なんじゃないかなと。具体的には無作為抽出のようですね、アンケート調査的なものを定期的に行いながら、「触れる・楽しむ」が、一般の市民の人たちにどの程度浸透しているか、とか、「動き出す」ということが、具体的に市民活動団体の人たちにとってどのように進んでいるのか、とかですね、こういったものが定点的にわかるようなものにしていかないと、なかなか評価は難しいんじゃないかなと思います。ただ、経費がかかる、人もかかる話ですし、もしかしたら思うような評価結果にならないことも、おそらく想像できるのですけれども、こういったものも真摯に受けとめながら、それらをまた第5次、第6次の施策の政策の中に生かしていく、こういったところが必要なんじゃないかなというふうに思いました。私からは以上です。

(殿岡委員)

最初に社会情勢等の話もあったのですが、前回は話がありまして、現在コロナの収束に向けた始まりとかね、ウクライナ問題とか、アメリカの金利上げとかで、今までと違う、未知の世界になってきて、この先のことは本当にわからないと思います。とは言うものの、多分みんな頑張らないといけないということで、この定量的な視点で見ると確かにわかりづらいと思うのですが、せめてね、例えば静岡市で、幸福度というか、みんな幸せなのかな、みたいなアンケートをよく静岡県単位では、都道府県単位では出したりしているのですが、そういうのがあれば少なくとも、まず、みんな幸せなのかなってというのは、毎年見てれば少しは、こうやっていって意味があるのかなと、直接市民活動と関係あるかどうかはまた次の話なのですが、まずは、満足度っていうのを幸せとか、そういうのを測ってもらいたいっていうのはちょっと、ありました。あとはですね、直接関係ないかもしれないのですが、大体、他の団体、青年会議所とかライオンズとか法人会とかっていうのは皆さん起業をしている方が多くて、全くそういう件数が増えてなくて、どこも会員が減っていく一方で大変なことになっているので、本当はスタートアップ企業の支援みたいので、そういう会社呼んできて、企業いっぱい増やしてくれるといいのですが、この前も、市民大会も大学生が最後、一番望んでいるのはUターンできる環境を整えてほしいっていうのはすごく言っていたので、もしアンケートというか、資料としてあれば、企業数みたいなのが年々どんな感じなのかな、とか、どれぐらい減っちゃっているのかなってというのがちょっとわかると、みんな尻に火がついて、静岡からイノベーションみたいなことが起きるかもしれないのですが、できたら少しでも直接関係なくても、資料が見られるような環境というか、整えてもらえると嬉しいなと思っていました。以上です。

(大畑委員)

大畑です。今、殿岡さんがお話された通りですね、新人部門というのですかね、新しく手掛けた人、影響力を持った人、その人たちをまず評価する、としたらどうかと思うのですね。全てのものに評価するというのは非常に難しいのですけれども、特に始め、発足間際の人ですね、重点的にやれたらどうか、これは審査員的なものも必要でしょうね。また競争的にやることによって、盛り上がってくるんじゃないかなと思います。以上です。

(山岡会長)

評価するにはやっぱりコストもかかるし、そういう中で、活動の始まりや立ち上げの部分を少し丁寧に評価したらいいんじゃないかという、評価に傾斜をつけるということと変ですけど、どこに重きを置くか、ということですよ。おっしゃる通りですね。時間と手間をかければいくらでも評価できるわけですが、それが目的ではないわけですから。きちんと施策を進めていくうえで必要なことですよ。

(山本副会長)

「定性的」にこんなに悩むのは、データが取りづらいからであって、定量と定性を両輪で並べて、定量と同じぐらい角度の高いものを取ろうと思うとほぼ無理なので、私はそこをアンケートを取るという手段はもちろんあるとは思いますが、それも前提の知識がないと「市民活動？いやよくわかんないし、関わってない」と回答しておしまいになってしまうと思ったので、私はこの評価という意味合いとはもう違うとは思いますが、しいて言うならサンプル調査やモニター調査みたいなイメージで、たくさんやらなくても、1件か2件やればいいぐらいで、さっきの浜松市にまた私は影響を受けているのですが、学校に行けば、中高生に向かって話してみればいい。中高生がしら一っとしたら、プレゼンが悪いのか私達の市民活動が悪いのかどっちかみたいところで、それでも1人か2人は何か喋ってくれると思うんですよ。それを私達がシェアしていける。浜松市さんが「若者」の枠で中高生と大学生を分けているんですよ。人口ピラミッドを想像すればわかると思いますが、ベビーブーマー2つが頭に重く、あとは漏斗状に狭まっていく、私たちは漏斗状の子たちのために何かをしなきゃいけないわけで、そうしたら若者を二段階に分けていることも納得のいくところで、あとは自治会さん、事業者さん、市民一般と、そういうふうに市民活動団体の中で市民活動を語るんじゃないかって、自分たちから出ていったらどうかなって、それを、分析はなかなか無理だけど、その結果を並べてみるだけでも、伝わるのがたくさんあるのではないかなと思いました。そしてそれを公開すると、一つのメディアとして、市が発信する、タウンミーティングみたいなものですが、そして何回か重ねるとパワーを持つてくるのではないかなと思っています。

(山岡会長)



今おっしゃっていただいたことも大事だなと思います。モニターなので本当に一つのデータ、あるいは二つ、三つの例でしかないのですが、それと、数字を突き合わせて見ることでまた見えてくるものもある。実際現場で起きていることを把握しておく、評価とは言えないかもしれないけど。それがこの定性的な評価としてできるところかなというふうに思うんです。だから何をもって「評価」っていうかはすごく難しいですけども、先ほどから出ている「適切な評価」、これは多分無理。無理なんですけど、でもこれからこういう施策を進めていく上でそういう状況を把握していくこと、それも含めて評価だって考えれば、それで精いっぱいのところというか、かなり十分なものになるのではと私は思います。

(川村美智委員)

この協議会の最初のころ、市民活動をやっている委員の皆さんが評価の数字が全然実態と見合わないというので、活発に議論したことを記憶しています。人口が減っているのに、毎回、新規登録者数が上昇してなくてはいけないということ、それはありえない、みたいな話をしていました。本当に難しいと、特にこういう状況だとそう思います。ただ、ここからネットのアクセス数とか市民活動の講座数とか、既に数字を取っていて、特に苦労しなくても拾えるものだったら置いておいて、それを評価基準にはしないかもしれないけど、今年は少なかったな、今年はこういう状況だけど割とよかった、みたいに参考程度にとっけてもいいのかなと私は思います。あと、前にも申し上げた、行政が政策的に、この施策にお金を投じたということであれば、それはどういうアウトプットであり、アウトカムがあったかということは捉えなければいけないと思います。重点施策として支出した場合には、成果を追っていくことは次の手を打つためにも必要です。それとは別に、会長や田中委員がおっしゃったように、個別にサンプルとして丁寧に追うことも組み合わせて。例えば、私が昨年受講した静岡市女性会館主催の防災講座「Jo-shizu 防災講座」では、その1年後にフォローのアンケートがありました。講座を受けた後に何か市民活動に参加しましたかとか、自分が企画に関わったものがありますかとか、イエスだったら具体的に教えてください、などの問いにネットの専用フォームで答えていきました。何を聞きたいかアンケート調査の設計をきちんと作っておけば、あまり手をかけなくても活動に参加した人の状況がある程度つかめると思います。

(木下委員)

木下です。前回ちょっと話をしたんですけど、これ定量的な視点って全部、市民自治推進課が取れるデータが並んでいると思っていて、今おっしゃったように、市民自治推進課として推進するためにこの施策をしたのでこうなりましたっていうことであれば、施策と基本的に紐づいているのかなって思うんですけど、ただ、この施策自体が目指すものっていうのは、もうちょっと広くなるのであれば、例えばパブコメの件数が増えたとか、ここに傍聴の人が増えたとか、そういったことも効果としては、「市民活動が促進されると、こうなってほし

い」というイメージがあったときに、それを提示することはできるかなと思いました。その施策の成果っていうのはダイレクトには繋がらないけど、私達が考えている市民活動が促進された状態っていうのは、きつこうだろう、こういうところに傍聴人が来て、異議あり、みたいに言って、パブコメがたくさん来て、市民が自発的に、ということが、別立てとして参考資料みたいな形であると意図しているところは伝わるのではないかと思います。ただ、実施した施策に対しての評価をするのであれば、この数字を基にせざるを得ない、けれども、それを改善していくために、どうも変容が起きていないので、この施策じゃなくてやっぱりそっちの方だったっていう振り返りが、中間報告なり、次期計画策定に繋がっていくのかなっていうイメージを今聞いていて思いました。前回も言ったのが、この市民活動が推進されるということの影響は、市民自治推進課だけではなくて、いろんな各担当課のところにも影響が及んで、そういうのも流れとして示すのは難しいんですけど、イメージとして出てくると、協働するときに、何で市民活動と一緒にやっていくのかみたいなことが他の課の人たちにも伝わったりしていいのかなっていうのも、ちょっと、結構難しいということは重々承知ですが、これはちょっとイメージとして。

(山岡会長)

そろそろ時間なので、これに関しては、実際どうするかっていうのはまた今後、こんな感じで入れてっていうことをどこかの段階で、4次計画が進んでいく中で考えていただくということでしょうか。

(事務局)

はい。今日はありがとうございました。まずはこの第4次計画の中で、評価をどのように進めていくか、どこまで書けるかということもあるのですけれども、こういった形で進めていくということは書きたいと思っているので、その計画案をまたご提示をさせていただくので、ご意見をいただけたらなと思っています。

(山岡会長)

定性的な視点も持ってちゃんと事業計画を立てていくということはすごく大事なことだと思うので、進めていきたいと思います。そうしましたら本日の議事は以上でございますので...

(川村美智委員)

すみません。答申の件で、一つ追加で発言させてください。

(山岡会長)

はい。

(川村美智委員)

いただいた資料1の13ページの(2)市民活動団体の運営を支援する取組の第2段落で「ふるさと応援寄附金等によるNPO等指定寄附事業」に触れています。実際にこれを受けている団体から、委員の皆さんに考えてほしいと相談を受けて発言します。このふるさと納税から出た活動助成金は「人件費を含まない」となっているそうです。制度導入時点の説明を伺ったときは、とてもいい取組と思いましたが、人件費がつかないと活動自体が大きくなるほど赤字になってしまう欠点を持ってしまいます。この文章では「活用しやすい制度となるよう改善を図りながら取組をすすめていく…」という表現があります。制度上難しいとのことですが、全国で見るといくつかの自治体は人件費も含めてやっているそうなので、ぜひそこは、何か改善策を考えていただけるといいのかなと思います。

(事務局)

事務局から説明させていただきます。ふるさと応援寄附金については寄附を静岡市が一旦お集めして、それをNPOへの事業補助金という形で支出する形になっております。今おっしゃられていた人件費が対象にならないというのが、元々の制度設計の時点では対象にしていくつもりだったのですけれども、制度を実際に進める中で、市が補助金として出すものについては、あくまでもその事業に対する補助しかできなくて、いわゆる運営費、その団体さんの、例えば事務所の賃借料ですとか、団体の運営をしていく経費、雇用されている方とかですね、そういった部分は補助の対象にはならず、あくまでも事業に対する補助金である、まずそういう事業補助金という考え方があって、ただ人件費を100%排除しているわけではなく、当然、その事業の中で必要となる人件費については対象になっていくのですけれども、どうしても、その人件費がいくらかというのが、正確に分けられないというか、事業の中である一定の人が、どれだけ団体の運営に携わっていただいたのか、あるいは補助の対象となる事業にどれだけ携わったかということについて明確に分けられないというのが、内部における検討なのですが、法務的な判断で人件費については、運営に係る経費が入っているか入っていないのかが分からないために、対象経費から一律で除くしかない、というのが今の状態です。担当部署としては当然、人件費は必要な経費だと思っていますし、実際、国等の補助金でも、人件費の出し方について、明確に分けられないけれども、こういう分け方で、必要な人件費分をみなすということは実際に行われていることなので、私どもの力不足でこうなっているのですけれども、そこは、ここにも書いてある通り改善をしていきたいなと思っていますので、もう少し頑張らせてくださいという、すいません、そういう状況です。

(川村美智委員)

田中委員も実際にそういう支援を使っているそうですが…

(田中委員)

はい。「ふるさと応援寄附金等によるNPO等指定寄附事業」の助成金を受けていらっしゃる方と共催でやらせてもらっているのですが、本当にやればやるほど赤字になってしまっていて、でも必要な事業なので、うちの団体の寄附金を人件費に充てて相談員さん給料を払っているという状況なのですけれども、これ手を挙げなくなっちゃったらなくなってしまうと思うと本当に切ないので、ぜひとも田中さんのお力で改善をお願いします。

(事務局)

ありがとうございます。

(山岡会長)

では、以上で、進行を事務局へお返しします。

会議録署名人

会 長